

# 月刊 JMITU ティニカ



1月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部  
セガ グループ分会 2025 年発行

No.481

## 25年春闘準備

### みんなが納得できる賃上げを

#### 物価高騰が止まらない

帝国データバンク調査では、主要食品の値上げは、22年14%、23年15%、24年17%となっています。また昨年夏のメの大幅値上がりはいまだに収まっていません。こうした異常な物価高騰により、私たちの暮らしはかつてなく悪化しており、賃上げがあっても暮らしが改善された実感がない、子供の教育費がたいへんと大幅な賃上げを求める切実な声が上がっています。

#### 賃金の上がる国への転換

実質賃金は、この30年近く下がり続けています。厚労省の調査によると、ピークだった96年に116.5だった実質賃金指数は23年には97.1まで落ち込

んでいます。23年の実質賃金は96年の83%まで低下、金額では68万円も実質的に年収が減ったこととなります。

世界と比較しても日本は「賃金の上がらない国」となっています。OECD39か国で24位です。(2023年)

#### 大企業は大儲け

大企業は労働者の生活悪化を尻目に大儲けしています。大企業の内部留保は539.3兆円(24年3月末)。株主への配当も32.5兆円とそれぞれ過去最高を更新しています。

大企業の「労働分配率」(労働者が働くことによって生み出した価値(付加価値)と人件費の比率)は過去最低です。

#### 労働法制改悪

財界と政府が進める労働法制改悪では、「1日8時間週40時間労働」という労働時間規制の原則で、労使の協定に基づく時間外労働や変形労働、裁量労働の要件を大幅に緩和する。

例えば36協定について言うと今は事業所ごとに過半数組合や従業員代表との36協定を結ぶ必要がありますが、それを本社一括で、従業員代表との協議で決めてはどうかという事が検討されています。企業の裁量で、労働者を好きなだけ働かせることが出来る仕組みづくりも検討されています。

#### 成果主義賃金・ジョブ型

「ジョブ型人事」とは個々の職務に応じたスキルへの到達度で労働者を評価し、未達成の労働者には賃下げや降格、他の職務への異動などを押し付けていくとい

うものです。日本ーBMなどのジョブ型人事を導入しているところでは、プロジェクト終了や事業再編で仕事がなくなった場合やローパフォーマー(低評価者)には、社内公募と称する制度に応募して自ら見つけることが出来なければ退職に追い込まれます。

「ジョブ型」が導入されている企業では、賃上げも極端な格差が拡大しています。

生活での支出は40代から50代が最もかかります。この世代は仕事上でも重要な役割を果たしています。しかし、この世代の賃金水準は20年前と比べ大きく落ち込んでいます。

中高年頭打ちの賃金の是正と50歳代以降の定昇ゼロや昇給なしのような年齢差別を撤廃させなければなりません。

25年春闘は物価高騰から生活をまもるすべての仲間大幅賃上げを目指したいと思います。

掌編小説

昇天橋

仙洞田一彦

年が明けた、といっても昨日の大みそかと、日常習慣が変わるわけじゃない。屠蘇気分、正月気分を味わおうと、何年か前まで元日は朝から酒を飲んだ。屠蘇は本来薬酒だが、飲むのはいつもの晩酌の酒。だが、正月番組のテレビ相手じゃつまらないのでやめた。子どもが小さい頃は「お年玉」で正月気分。父母のいる故郷への帰省もあった。とつくに両親は亡くなった。今はゆとりも、体力もない後期高齢者だから、昨日と変わらない生活。

午後の散歩もいつも通り。しかし元日は一年の始まり、

それにふさわしい散歩にしようと思った。そういえば、屠蘇を飲み過ぎた気分で、フラフラよろよろの散歩も正月にふさわしいかもしれない。

最近酒を飲んでいなくてもよろよろ散歩だ。それはともかく、格好つけて言えば原点に返るのだ。上京し、東京で生活を始めたところを散歩するだけのこと。

一九六八年の春、上京した。今年の春が来れば、満五十七年だ。当時住んでいたところは、いま住んでいるところから、徒歩と電車で約一時間。原点に立って二〇二五年を始めよう。意気込みはあるが、正月の装いはない。ダウンのコート、綿の濃紺のズボン。靴はスニーカーといつものスタイル。どれも大分くたびれ

ている。かといって、誰かが何か言うわけではない。心の中では「爺だから仕方ない」くらいは思うかもしれないが、口には出さない。それをいいことに自分で自分を許して、着られなくなるまで、履けなくなるまで使う。

煩わしいのでスマホも持たない。時間は知りたい時があるので、三千円の懐中時計を持っている。

駅までの人通りは、いつもより少ない。二十四時間営業のコンビニ以外、商店もほとんど閉まっている。

電車の乗車時間はせいぜい十五分か二十分。目的の駅に着いた。昔は、地上にあった駅が地下になっていた。地上に出るまでのエスカレーター

の感じからすると、かなり地下深い。駅名も変わっていた。地上に出て驚いた。思わず何度も見まわした。まったく見知らぬ土地に来たようだ。

昔は駅の改札を出るとすぐ、民家が並び、町工場もあり、人の生活が感じられた。それがない。

道路は舗装されていて、駅の真上に当たるところは、駅ビルのような鉄筋コンクリートの建物があるが、周囲には建物がない。ふつうは駅ビルを中心にして商店街があるが、何もない。地上に出て来るまでに、駅の売店のようなものは見かけたが。

広場はバスロータリーのよくな作りで、停留所で見かけるのと同じ標識も立っている。何個か椅子も並んでいる。舗装道路と道路の間は、土がむ

き出しになっている。それがずっと広がっている。都市計画とかがあって、その建設途中なんだろうかと想像したが、それにしても広大な土地だ。

遠くに建物は見える。目測では一キロぐらいあるのだろうか。それとも、もっとあるのか。私はどちらに行ったらいいのだろう。分からなかったら地下駅に戻って、電車で帰ればいいのだが、せっかく来たのだ。天気もいい。

いま眼前に広がる風景に、昔の風景を重ねてみると、私の行って見たいところは更地になっているかもしれない。更地になってしまっていたら、当時を思い起こし、初心に戻るなんてことは不可能だ。しかし、その場所が更地になっていたとしても、実際にその

地に立ってみれば、「新たな年に向けて出発」という気分になるかもしれない。原点に立ち返ったと思うかもしれない。進むべきか。戻るべきか。元

日早々悩んでしまった。もう疲れてしまった。バス停に四つばかりある椅子の一つに腰かけた。先頭のに腰かけると客だと思われるかもしれないので、後ろの席にかけた。上には申し訳ばかりの屋根がついているだけだから、日差しがじかに当たって気持ちいい。日向ぼっこ、昼寝にはもってこいの場所だ。

立ち尽くしていたところに同年配のスーツ姿の男性がこちらに向かってきた。なんとなく通勤する姿に見えた。歩き方、方向に迷いが無い。こ

れから地下駅に降りるかもしれない。

元日から通勤かとも思ったが、勝手な思い込みだから違うかもしれない。声を掛けた。

「すみません。昔、なんとか橋というのが、この近くにあったはずですが、どう行ったらいいでしょう」

橋の名前が思い出せなかった。もしここに住んでいる人なら、それで通じるだろうと思った。

やはり同年配だ。歩みを止めてくれた。

「ああ、ショータン橋ね」「ショータン橋……え？」

記憶にある橋の名前とちよつと違うようだ。昔のことだから橋の名前も変わったかもしれない。

「天に昇ると書いて昇天橋」

私の疑問に、丁寧な答えてくれた。たしかに空港が近いから「昇天」がふさわしいかもしれないと思った。

「その橋にはどう行ったらいいんですか」

橋の名前が記憶と違うが、とりあえずその橋に行ってみようと思った。行ってみれば、私の単なる記憶違いかもしれないかが分かる。

男は振り返り、「こちらの道をです」少し道を戻りながら、三差路のところまで行き真ん中の道を指差し「この道を真つすぐ行って、広い道に出ますから、そこを右に曲がってください。右ですよ」

私も男のあとについて行き「この道ですね」と地面を指して言った。真つすぐと、右斜め、左斜めに進む三叉路だ



が、そこに立って先の方を見てもそれほど変わらない。どの道を行っても同じように見えるから、聞いてみなければ分らない。

「そうです、そうですこの道です」

男もまた地面を指差して言った。

「ありがとうございます」

私は頭を下げた。

「じゃ、気をつけて、お大事に」

男は言って、私の出て来た方に向って行った。これから電車で出勤か。私は男を見送りながら、男の最後の言葉が気になった。

「気をつけて、お大事に」、何に気を付けるのだろう。真昼間から強盗もないだろう。車かも知れない。見通しの良い

所だから、車がぶつ飛ばすのだろう。そう思いながら、とりあえず、言われた道を歩き出した。「お大事に」は、見るからに、私がよろよろしているからか。親切に教えてくれたのに、大きなお世話だなどと、内心毒づいた。

人なんか通りそうもない道だったが、人が数人歩いていた。

歩行器を押して歩いている男を追い越した。体を左右に揺らせながら歩いている。着ているものは、私のものよりくたびれている感じだ。よそ行きという感じはまったくない。綿のズボンは皺だらけ。ダウンのコートも色が焼けている。黒色が白っぽくなっているところもある。年齢は私より上に見える。

歩幅が十数センチしかないのではないかと思われる女性も追い越した。つま先はつつ、つつと忙しく前に出るものの、歩幅がないから進まない。じっとわき目も振らずに前進していた。

ガードレールに腰を下ろしていた男も追い越した。ずっと前にいたが、何度も立ち止り、立ち止りしていたから追いついてしまった。

追い越してから、なぜバスを使わないのだろうと、考えた。タクシー乗り場もあったのに。

しかし、自分のことを考えると、歩行は運動で、健康のためだ。いま追い越してきた人も運動のためかもしれない。それ以前に金がないということもある。

反対方向、つまり私の歩いてきた方、駅へ向かう人もいた。男も、女も、同世代か、上くらいの人達ばかりだが、こちらは何となく元気がいい。帰りの人の方が元気に見えるのは、用事が済んでホッとしたからなのか。

橋が見えてきた。懐中時計をポケットから出してみると、三十分以上歩いたようだ。橋の一番手前の柱に「昇天橋」の字が見える。四、五人、人が立っている。警察官の制服に似ているが、警察官とも違うようだ。検問をしているのか。

道はいつの間にか車道がなくなり、歩道ばかりになっていた。

前に二人いた。何か質問されている。私はその後ろについた。待ちながら橋の向こう

に見える風景を見た。近くであるにもかかわらず、靄がか

かっているように見える。木造の平屋建て、二階建ての家が見える。道路もこの歩道の幅で、ずっと先まで続いているように見える。遠くの方では羽根つきをしているようだ。たしかに懐かしい風景だ。少し上に目を向けると風が上がつているのが見える。

なんとか橋は昇天橋だったのか。それにしてもなんでこんなところで検問を。そういえば、昔は空港に向かう道路でよく検問をしていたのを思い出した。でも私の向いている方向には空港はないはず。空港は背中の方、反対方向だ。前の方の人はいくつか質問を受けた後、金属探知機のような門を潜り抜けた。

「どうぞ、そのままお進みください」

検問している頑丈そうな男が言った。言われた方は、がつくり肩を落として、言われるままに橋を渡って行った。

次の人は、門を通ると「お帰り下さい」と言われた。私とすれ違う時、その人は私と目が合うと「ニヤッ」とした。

目も、鼻もでかい顔をして、睨まれたら震え上がりそうだった。私はすぐに眼を逸らせた。

「次の方」

呼ばれて私は進んだ。

「本籍地、現住所、姓名、生年月日を言ってください」

聞かれて、何だ単なる本人確認かと思い、聞かれた通りに答えた。

「門を通って」

また言われるままに門を通

ると「お帰り下さい」と言われた。

「私は怪しいものでもないし、凶器も持っていない」

私は声を大きくして言った。「分かっています。とにかく、お帰り下さい」

「お分かりなら、行かせてください」

「だめです」  
体当たりしたってびくともしないような相手だし、元日早々こじれるのも嫌だし、向きを変えてもと来た道を帰った。

何故だ。道々考えた。すると、「ニヤッ」とした人が途中で待っていて、話しかけた。「あんたもよかったね、今年は三途の川の橋だよ。喜ばなけりや」

喜ばなけりやと言われても、言っている男の顔を見たら怖さが先に立つ。私は思わず身を退いた。すると男は、一歩前に出て「うれしいじゃないか。なつ。二人で乾杯しよう」そう言っ、私の肩を思いっきり叩き、揺さぶった。

「お客さん。お客さんこんなところで寝ないでください」

目を開けると、バスロータリーにあるベンチだった。目の前の男は、肩を叩いた男だ。目も鼻も口もでかい。私は思わず顎を引いた。

「すみません」

私は立ち上がり、急ぎ足でビルにある下りのエスカレーターに乗った。

橋の向こうのあの風景は、あの世の風景なのか……